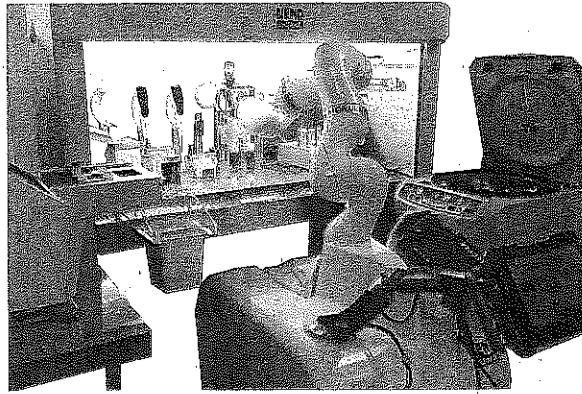


細胞培養の完全自動化目指す

開発は最終ステージへ

ウエノ 創薬研究を効率化

自動車体接組立ラ「ラボ・ベンチロボット」の開発を群馬大学医学部の設計・製作を手掛けるウエノテクニカ（桐生市広沢町5-131）と共同で進めている。同1、塩谷功社長（027-73521054）は、6月までに人間と同等レベルで作業ができることを自動細胞培養システム確認。完全自動化に向け



自動で細胞培養を行うロボットアーム

てさらに開発を進め、今年中に実用化する計画。同開発は、従来、大学

などの研究員が行っていた細胞培養の手作業を、フレキシブルな動作が可能な7軸関節のロボットアームで再現し、研究の効率化や作業負担の軽減を目指す。自動化するのは、細胞の入ったフラスコを格納庫から取り出し、培養液を交換して再び格納庫に戻すまでの作業工程。16年7月からは、群馬大学医学部で実証実験を行っている。ロボットの操作は、省スペースのタッチパネルを採用。両側を解放したクリップベンチを使用することで、作業者との協働も可能。ベンチ内のキットを入れ替えれば、さまざまな研究へも転用できる。6月までに、薬液の注入や攪拌（かくはん）なども行う一連の作業について、人の動きと同等レベルを実現した。今後は、365日稼働可能な完全

自動化に向けて、さらに開発を進めていく。SI開発ディビジョンの吉原明リーターは「自動化が遅れている三品（食品・化粧品・医薬品）産業に、自動車組立における自動化技術を生かしてみたい」と考えて開発を始めた。今後は、細胞培養にとどまらず、物流など幅広い分野のニーズをくみ取り、システム

化をコトネイティブとしていきたいと話している。同社は広島市に本社を置く自動車部品メーカー、ヒロテックのグループ会社。